

太宰府の文化財

441

御笠山で風の神を祀る

太宰府市の北東にある宝満山は、中世以前の記録には「御笠山」と記され、また、山に雲が掛かる姿をもとにしてか「竈門山」とも表記され、複数の名で古代以来史料に度々登場しています。山内の信仰に関する祭祀跡や窟、堂社跡、坊跡などの保存状態が良好であり、現在までの調査・研究の結果、古代から近世に至る遺跡の

変遷が具体的に確認されています。特に古代においては、対外交渉に関する国境での祭祀を担った遺跡として象徴的な存在であり、我が国を代表する山岳信仰の遺跡として重要であることが認められ、平成25(2013)年に国の史跡となり来年で10年を迎えます。

奈良の都平城京の北東にも同名の



宝満山の山頂と上宮殿(東から)

「みかさやま」があります。『続日本紀』には養老元(717)年2月1日の条に、遣唐使が出立に先立ち蓋山(みかさやま)で航海の安全を願ったことが記され、宝龜八(777)年2月6日の条には、遣唐使が前年に風と波が不調で渡海できなかったため天神地祇を春日山(御蓋山)の下で拝した、と記されています。太宰府の宝満山と同様に、奈良の都の北東の山では対外交渉に際して「みかさやま」で祭祀がおこなわれていました。実はこの頃の中国「唐」の都であった長安でも『大唐郊紀録』によれば、立春後の丑の日に国城の東北で「風師」

が、都の北東で祀られたのは特に「風の神」だったようです。宝満山でもかつては風の神が祀られていました。明治初期に編纂された『福岡県地理全誌』には、竈門神社下宮の末社の中に「風神社」が見られ、江戸時代に書かれた『筑前国続風土記』には、山頂下に「風天祠」があり、弘法大師(空海)が風神を祀ったとされています。また、『竈門山旧記』という江戸時代に編纂された史料には、「今に至り毎年六月吉日納風の法を執行、彼の風穴を祭る事空海法師の遺法なり。風穴は秘密所なり。」と記載されています。

(風の神)を祭っていることが知られています。唐では日、月、星、山、川、藪、沢などを人格化し、これを「天神地祇」と総称したとされています。

航海技術が発達していなかった古代においては、遣唐使の派遣はすべて風を頼っての航海であり、国外からの情報や文物の請来にとって風の神を祭ることは国家の一大事だったようです。『日本書紀』には神功皇后の笠が風で飛ばされ、その笠が落ちたところが「御笠」である、という物語をのせていますが、ここにも風の話が象徴的に織り込まれており、興味深く読み取れます。

文化財課 山村 信榮

編集/太宰府市総務部経営企画課: 〒818-0198
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☒ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの
フォローをお願いします!



広報だざいふ 2022.2.1 (令和4年)